

第2回「羽仁監督と映画を見る会」開催

皆様、第2回「羽仁監督と映画を見る会」（通称羽仁塾）開催のお知らせです。
前回お知らせした通り、下記の内容で開催いたします。

* 都合が悪く欠席される方は事前にメールでお知らせ願います。

日程

- ・ 日時 1月19日（土）14時から 記録映画保存センター 事務所内
- * 前回より1時間早くスタートします。

上映作品

- ・ 上映作品「動物園日記」（74分）1本のみです。

1957年／岩波映画製作所／白黒／74分

◎監督・脚本：羽仁進◎撮影：今野敬一◎録音：桜井善一郎◎照明：本橋俊男◎音楽：和田則彦

◎監修：林寿郎（上野動物園飼育課長）

◆1882年に開園した歴史ある上野動物園。近代が生み出したこの人工的な環境を舞台に、飼育係と動物の生活の記録を通して、動物と人間のかかわり合いを見つめた一篇。今から60年前の上野動物園が見られる！その後、アフリカに渡り動物を描くことになる羽仁の原点。

* 今回は16ミリフィルムで上映いたします。

参加者

- ・ 当面は第1回の申し込み者限定です。
- * 会場が狭いため

構成

- ・ 上映と質問で2時間以内とします
 - * 上映後参加者から羽仁監督に質問する形式です。
- 尚、3回目からは参加者の作品も見る上映会にします。

世話人

井手洋子

はなぶさあや

大澤未来

村山英世

○一押し 作品 岩波映画時代

タイトル	原版	委託/企画	西暦	分数	色	演出	撮影	Vマザー	原版保管場所
生活と水	35	厚生省	1952	20	B/W	羽仁進	栗林実	SD	国立映画アーカイブ
教室の子供たち	35	文部省視聴覚課	1954	29	B/W	羽仁進	小村静夫	SD	国立映画アーカイブ
双生児学級—ある姉妹を中心に—	35	文部省学術課	1956	40	P/C	羽仁進	小村静夫/ 今野敬一	SD	国立映画アーカイブ
絵を描く子どもたち	35	自主制作	1956	39	B/W	羽仁進	小村静夫	SD	国立映画アーカイブ
動物園日記(第2回上映)	35	自主制作	1957	74	B/W	羽仁進	今野敬一	SD	国立映画アーカイブ
海は生きている	35	日活	1958	60	カラー	羽仁進	小村静夫	SD	国立映画アーカイブ
法隆寺(第1回上映)	35	文化財保護委員会	1958	23	カラー	羽仁進	瀬川順一	4K	国立映画アーカイブ
不良少年	35	自主制作	1960	91	B/W	羽仁進	金宇満司	HD	国立映画アーカイブ
充たされた生活	35	松竹	1962	108	B/W	羽仁進	長野重一		松竹
彼女と彼	35	自主制作	1963	116	B/W	羽仁進	長野重一	HD	国立映画アーカイブ
ハローCQ	16	東京12チャンネル	1964	27	B/W	羽仁進	西山東男	VHS	

岩波以降の作品

手をつなぐ子ら	35	昭和映画/大映	1964	100	B/W	羽仁進	長野重一		角川
ブワナ・トシの歌	35	東京映画/昭和映画	1965	103	カラー	羽仁進	金宇満司		東宝
アンデスの花嫁	35	東京映画/羽仁プロ	1966	103	カラー	羽仁進	長野重一		東宝
初恋・地獄篇	35	羽仁プロ/ATG	1968	105	B/W	羽仁進	奥村祐治		東宝
愛奴	35	創映プロ/松竹	1969	98	カラー	羽仁進	奥村祐治		松竹
恋の大冒険	35	オールスタッフプロ テアトルプロ	1970	95	カラー	羽仁進	奥村祐治		東宝
妖精の詩	35	羽仁プロ	1971	99	カラー	羽仁進	マリオ ・マジニ		日本ヘラルド
午前中の時間割り	16	羽仁プロ/ATG	1972	101	カラー	羽仁進	佐藤敏彦		東宝
動物家族	16	フジテレビ	1974 1975	30	カラー	羽仁進			
アフリカ物語	35	サンリオ・フィルム	1980	114	カラー	羽仁進	サイモン ・トレパー		サンリオ
予言	16		1982		カラー	羽仁進	奥村祐治		
歴史=核狂乱の時代	16		1983		カラー	羽仁進			

第2回「羽仁監督と映画を見る会」レポート

2回目となる「羽仁監督と映画を見る会」は、新年明けて2019年1月19日（土）14時より、記録映画保存センター事務所内にて行われました。13名の参加でした。

今回の上映作品は、'57年製作の「動物園日記」（74分／モノクロ）でした。羽仁監督作品としては、'55年『教室の子供たち』、'56年『絵を描く子どもたち』に続く作品で、1回目で鑑賞した「法隆寺」がこの翌年'58年と続きます。当時、この「動物園日記」は日活映画の「ジャズ娘誕生」（主演：石原裕次郎・江利チエミ）と併映で公開されました。

作中では、動物園の日々を撮る、飼育係と動物の心の交流がテーマ、と羽仁監督がおっしゃるように、丹念に動物や飼育係の日常が描き出されていきます。毎朝、大量の餌が飼育係の手によって、動物によってサイズや切り方を変えて丁寧に準備されていく様子や、育児放棄されたライオンの赤ちゃんを飼育係が親代わりになって育てていきます。神経質といわれるカバの出産シーンや、伸びすぎた牙を糸鋸で切る様子、夜は動物たちによって寝ている姿もそれぞれで、安眠できるのは虎やライオンといった猛獣たちで、草食動物は断続的だったり、ゾウは見張りを立てて寝ています。サイのお見合いでは、雄のサイが突如として暴れ出し、メスが怪我を負い大騒ぎとなり、また途中には、園内の小屋に保管されている戦中餓死させてしまった動物たちの剥製が映し出されます。カバの飼育係の渋谷さんは園内の焼け跡に建つ小屋で暮らしており、子供6人と夕飯を囲むシーンなどもおさめられています。園内で一年近くかけて撮影された様子が、一日一日の出来事として凝縮される形で、見事に構成されていきます。

上映後は、司会の井手さんが聞き手となり羽仁監督に45分ほどお話しいただきました。小さい頃から動物が大好きだったとのことで、「僕の初めての友達はおオサンショウウオでした。目が合って、おオサンショウウオが飛びついてきたので、背負って池へ連れて行きました。」という衝撃の(!) お話しから始まりました。

動物園日記は、飼育係の方達と信頼関係を結べたことによって、貴重なシーンに立ち会うことができ、猛獣たちも至近距離から撮影することができたといえます。参加者からは、「動物たちがカメラ目線で、自分が見られている、目が合ったという感覚は初めてで大興奮だった！」という感想も聞かれました。

また戦争中、動物に餌をやることを禁じられ、薬を使うこともできずに餓死させた、動物たちが信頼していた飼育係も為すすべがなかったその状況がいかにかにひどいことだったかと述べられ、当初は戦争についての話しはもっと長く入れ込んでいたものの、日活の方針で大幅にカットになったとのことでした。

特に印象的だったのは、「人間は飛ぶ瞬間がある。その飛んでいく瞬間が美しい。それを撮りたいと思っているんです。」という言葉でした。それは例えば、『絵を描く子どもたち』の中で、絵を全く書かない男の子がいて、その子の家に何日か通ううちに、その少年が羽仁監督を見てニコッと笑ったそうです。もうすぐ飛ぶ、という予感がありカメラをまわしていくと数日後から絵を描き始めた、というエピソードを語られました。

16ミリフィルムで作品を拝見し、そのあと監督のお話もたっぷり聞くことができ、今回も非常に充実した時間となりました。

尚、会の模様は参加した常田カメラマンがビデオ撮影記録して下さいました。

